

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Urban Character of Festivals in Burma

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高谷, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004322

祭 祀 と 地 域 性

—ビルマ・ラングーン研究から—

高 谷 紀 夫*

Urban Character of Festivals in Burma

Michio TAKATANI

Hpayá-pwé is one style of festivals in Burma whose origins can be found in Buddhist modes of festival-making. Though most *hpayá-pwé* are pagoda festivals, in another type of *hpayá-pwé* the *hpayá* refers to the Buddha image. One example is the Yankin 28 Buddha images festival (*Hna'jei'shi'hsu-hpayá-pwé*).

Yankin is a township in the suburbs of Rangoon. Development of this area began in the 1950s, and it is essentially a new dormitory town for the capital zone. Since the Yankin 28 Buddha images festival was held for the twenty-first time in 1986, its history is brief. The main event is a procession of 28 Buddha images on sacred palanquins.

Procession is one common and distinct form of event in rituals. There is no doubt that the important motivation of procession-making by Buddhists is donation (*danà pyù*) for merit-making. Merit-making is a basic mode of action that is associated with the identity of Buddhists. The processions for merit-making take the offerings brought by laymen to the space for the donation ceremony, where the offerings become sacred. Thus such a procession functions as a demonstration of donation. On the other hand, the procession of the Yankin festival is made to display Buddhas and collect contributions.

This festival has the following features not noted hitherto:

- (1) The main purpose is to be free from calamity. Though the basic motivation is to donate for merit-making, the festival can be explained entirely in secular terms;
- (2) The Buddha images used in this festival were originally made from the Bo tree (*Nyaun-pin*). The Burmans seldom

* 鹿児島大学, 国立民族学博物館共同研究員

- cut Bo trees, for Buddha is believed to have found enlightenment under one, according to Buddhist literature;
- (3) The center of the festival is not at any pagoda or monastery, but at one *dammayoun* (hall for Buddhist laymen);
 - (4) The procession is an entertainment for the participants and the audience, and one without destination, since the starting point (*dammayoun*) is the same as the goal;
 - (5) The main action of the procession is street performances and the collecting of donations;
 - (6) Most blocks of the Yankin township have a hand in the management of the festival, so it influences the social ties there; and
 - (7) Apart from participation in the main procession, the way each block celebrates varies. Some blocks start the festival one week in advance of the procession, whereas others start it only two days before. Thus the independence of each block is maintained.

This festival is organized in the traditional manner with respect to date, composition and costumes, but compared with other festivals in Burma it may be more receptive to change and the adoption of new components. Recently, some other townships of Rangoon have started the same type of festival. Future changes in these festivals should be monitored.

プロローグ	(2) 第21回(1986年)28仏祭礼
I. 祭祀の背景	(3) 祭礼起源伝説
(1) フィールド概観	IV. ヤンキン28仏祭礼の設計図
(2) パヤー・プエ	(1) 祭礼の目的
II. 行列のビルマ民族誌	(2) 祭礼の実行組織と仏教思考体系
(1) 行列の意味	(3) 祭礼の構成——行列の意味
(2) ビルマの行列	(4) 祭礼の社会性
(3) 儀礼行列と行列儀礼	(5) まとめ——祭祀の都市性
III. ヤンキン28仏祭礼	(6) 祭礼の増殖とその将来
(1) 祭礼の素描	エピローグ

プ ロ ロ ー グ

ラングーン。2年程過ごしたこの町で抱き続けていた素朴な疑問はこの町が「都市」なのかどうかということだった。人口集中、舗装された道路網、通勤タイムの交通渋滞、映画館などの娯楽施設、物資の集中と常設の大マーケット、官庁街、上下水道、ゴミの山など観察される「都市」の諸断片に加え、この町がイギリスの植民地化によって下ビルマの中心として発展してきた歴史を考えれば、物理的に「都市」であることは否定できない事実である。それでもである。この町に住む人たちの意識の中に確固たる「都市」民としてのアイデンティティがあるのだろうか。「都市」に対するあこがれはある。だがそのあこがれは、物資の豊かさ、便利さを価値基準とした相対的なものにすぎず、「都市」のイメージは非「都市」圏の人たちにとっては現実の世界の延長線上に存在しているにすぎないといえるかもしれない。ここで改めてことさらに、「都市」と非「都市」の相違を強調するつもりはない。いうまでもなく「都市」は経済的に「都市」以外の地域と密接に結びついている。「都市」民は生命維持のための物資を管理蓄積することはできても生産することはない。「都市」は人類の発明であるが自立的な存在というよりも、生活上のある特定の機能を集中的に発達させてきた生活空間なのである。

「都市祭祀」という儀礼のくくり方がある。このくくり方は、「都市」の規定を前提とする。だが本論文では、最後の考察まで意図的に「都市」ということばを避けることにしたい。なぜなら「都市/非都市」という図式はあまりに単純すぎ、ラングーンが「都市」であるかどうかの議論を飛び越えて、「都市」で行なわれている祭りだから「都市祭祀」という非生産的なトートロジーに陥ってしまう。

祭祀はその基盤となる地域との結びつきを抜きにして語ることはできない。しかもその祭祀が地域の発展という歴史的脈絡で明瞭にとらえられるとするならば、その結びつきは一層重要なものとなる。本論文は、ビルマ・ラングーン市の行列パフォーマンスが特徴的なある祭祀を取り上げ、その祭祀が他のビルマの諸儀礼と異なる点を明らかにし、その特徴を地域の特異性に結びつけて論じることを目的とする。

本論文では以上の問題意識と考察目的にそって次のように構成する。まず祭祀の背景をフィールドと祭祀分類の面から概観する（Ⅰ章）。次に祭祀の特徴である行列について広くビルマの民族誌から考察する（Ⅱ章）。さらに祭祀の実際の展開を起源伝説を含みながらたどる（Ⅲ章）。最後に祭祀の設計図を分析的に描きながら祭祀と地域性の関係を考察することで、逆にビルマの文化的脈絡における「都市」にせまるこ

とにしたい(IV章)。

I. 祭祀の背景

(1) フィールド概観

ラングーン市。ビルマ全人口の約14分の1にあたる250万人余りが340平方キロメートルの空間にひしめくビルマの首都。2年程過ごしたこの町で、多くの儀礼や祭祀に出会った。そのひとつが本論文で扱うヤンキン・タウンシップの28仏祭礼¹⁾である。以下この祭祀をヤンキン28仏祭礼と呼ぶことにする。この祭礼は、1966年に始まり1986年で第21回を数えている。

ヤンキン・タウンシップは、現在行政的にはラングーン管区ラングーン市内27のタウンシップのひとつである。ラングーン市の北東部に位置し、西側にはインヤー湖と背中合わせにカバーエー・パゴダ・ロードが、東側にはラングーン環状線の鉄道が走っている。鉄道を越えると向こう側は、南オッカラップ、ティンガンジュンの各タウンシップ、南側はサヤサン・ロードを隔ててタムエ、バハンの各タウンシップが隣接している。北側の境界はチート一河で、その北方はマヤンゴン・タウンシップである。

ラングーンの歴史はそれ程古くない。ビルマ史の中で明確に登場するのは、下ビルマデルタ地帯の覇権抗争のさなかであった。時は18世紀の半ば。イギリス、フランスのヨーロッパ勢力がしのぎを削り、シリアムにはモン族が根拠地をおき、そしてビルマ族は自分達の国を再建しようと奮闘していた時代である。『ラングーン史』の著者、B. R. Pearnによれば、ラングーンの町は、18世紀に至るまではダゴンという名で呼ばれ、河沿いの一村にすぎなかったといわれている。[PEARNS 1939: 37]ラングーンにはビルマ全土から信仰を集めるビルマ最大の仏塔シュエダゴン・パゴダがある。その縁起では、釈迦の存命中にインドに旅した2人の商人が持ち帰った釈迦の聖髪を納めていると伝えられ、ダゴンはシュエダゴン・パゴダの門前町としての顔も持っていた。だがビルマ全体の信仰のシンボルとして発展するのは歴史的にはラングーン開発以降のことと考えるのが妥当であろう。

1) ナジェッシッス・パヤー・プエ (*hna' jei' shi' hsu-hpayá-pwé*) と呼ばれる。尚本論文中のビルマ語のカナ表記は実際の発音に近いものとした。またローマ字表記は、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所で作成された表記一覧に一部修正が加えられ、同大学ビルマ語研究室(代表奥平龍二教授)を中心としたビルマ研究グループによって出版された *Burma and Japan* で採用された表記方法を用いた。[[THE BURMA RESEARCH GROUP 1987: 18] 尚、この *Burma and Japan* に所収された拙論では、ヤンキン28仏祭礼についての序論的な考察を試みている。[TAKATANI 1987]

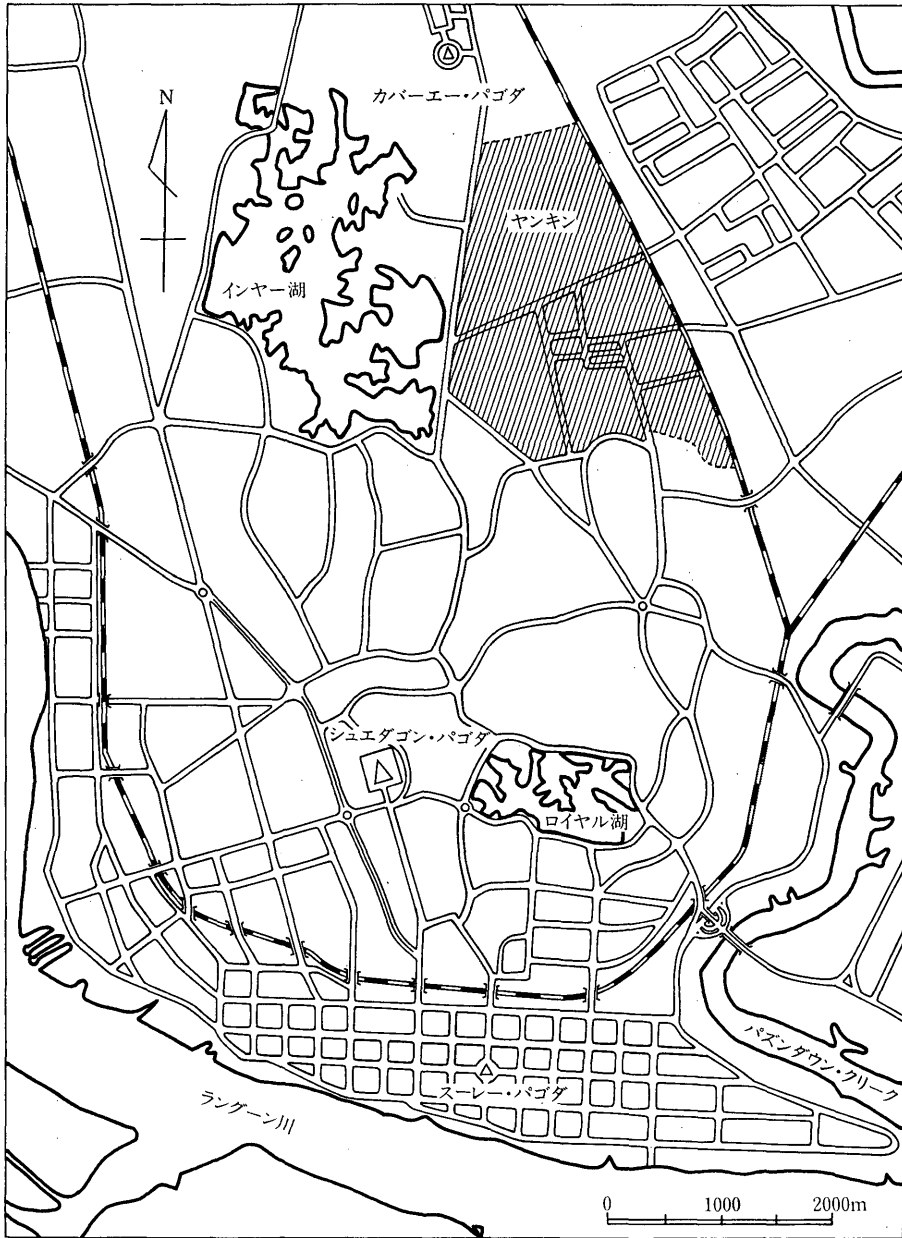


図1 ラングーン

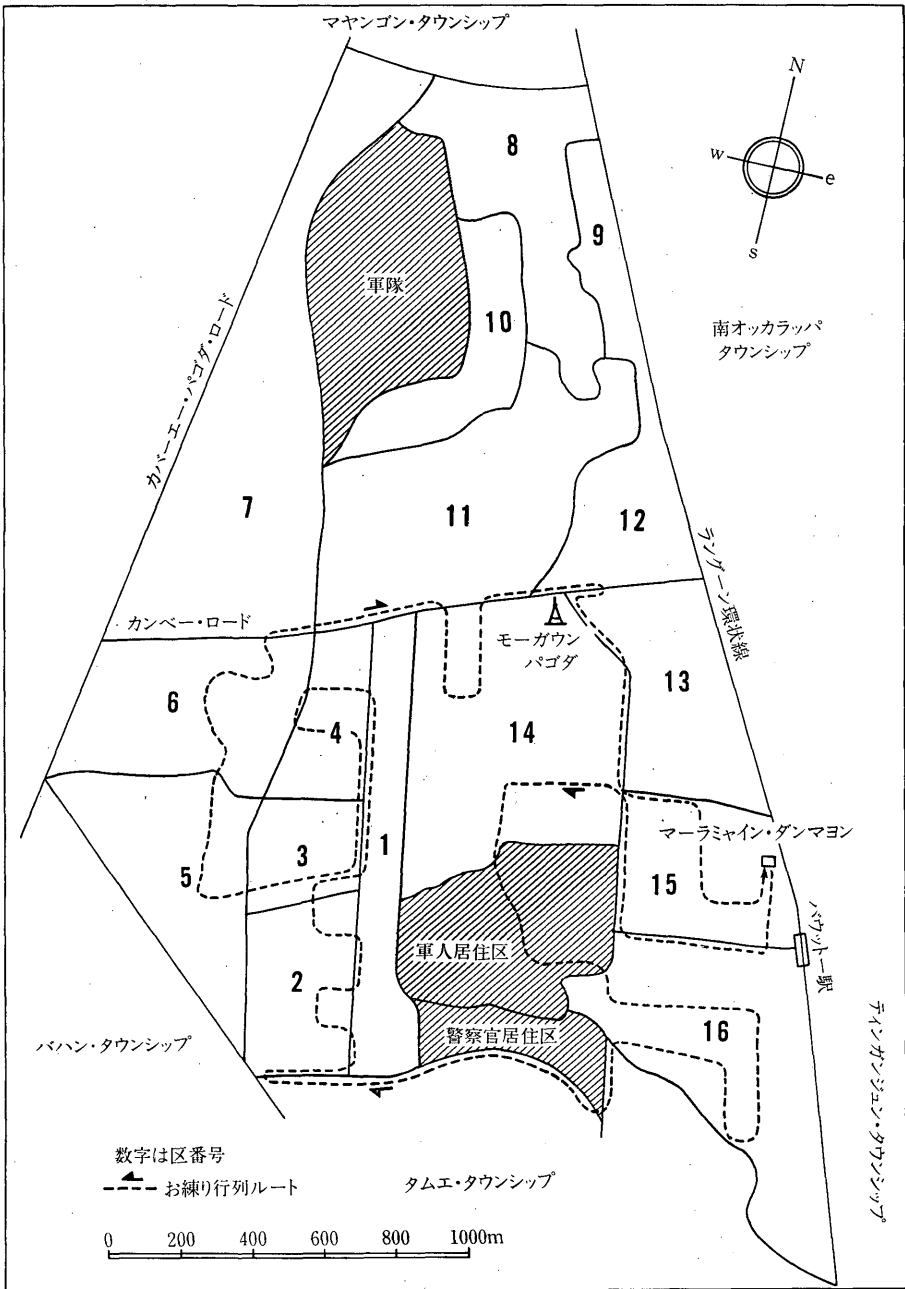


図2 ヤンキン・タウンシップ

覇権抗争の中からアウンゼヤー（アラウンパヤ王）が勝利を納め、1755年5月ダゴンを占領する。この町を王は「戦争が終わった」の意味でヤンゴンと改めて命名した。ラングーンはその英語読みである。これ以降シリアムは衰退し、ラングーンはビルマの王によって開発されていく。しかしながら、当時のラングーンの状態を上述の『ラングーン史』からたどると、生活領域とみなせるのは、パズンダウンとスーレー・パゴダ周辺の堀で囲まれた地域にすぎなかったのであり、シュエダゴン・パゴダ付近、さらに西部の現在のアローン地区は未開発の状態であった。その後第一次英緬戦争が1824年に勃発する。戦後1841年に、タラワディ王によってラングーンは再建される。しかしラングーンの開発がビルマ側によってなされるのはこの時代までで、第二次英緬戦争で下ビルマがイギリスの植民地下に入ると開発の主導はイギリスに移り、彼らの手でラングーンの開発は進むことになる。

1853年にイギリス人フレーザー中尉により現在のラングーンのプロトタイプが計画される。そのプランでは、ラングーンはパズンダウン・クリークとラングーン河、そしてフライン河に東南西を囲まれた地域で、北の境界は現在のボージョーアウンサン・ストリートという鉄道のすぐ南を東西に走るルートにあたっている。この地域が道路が基盤の目のように走るオールド・ラングーンである。その後のラングーンの開発は、地形上主として北方に伸びていった。だが1938年当時のラングーン市の北の境界はまだインヤン湖の南側にすぎなかったのである。従ってラングーン首都圏の本格的な開発は、ビルマ独立以降まで待たなければならない。フレーザーが都市計画にあたって想定した人口は3万6000人だったといわれる。[AUNG MOE 1983] だが人口はその予想をはるかに上回って級数的に増加し、現在に至っている。

ヤンキン地区の開発はビルマ独立以降である。当時の状況について大野徹氏は次のように述べている。「首都の急増する人口の深刻化の一途をたどる住宅問題を解決するためラングーンの近郊に衛星都市を建設して市内の過剰人口を分散する計画は、ウー・ヌ内閣当時立案された。ラングーンの北東地区ヤンキンに5000世帯を収容し得る集合住宅が建設されたのは1950年代に入ってからで完成したのは54年であった。」[大野 1982: 96] 首都圏開発は、さらに南オッカラップ、北オッカラップ、タケタと1959—60年に当時のラングーン市長トーン・セイン大佐によって続行された。[AUNG MOE 1983]

ヤンキンの歴史については、タウンシップの中央を東西に走る道路の名前に残るカンバーと昔呼ばれていたことが知られている。カンバーはモン語の舟着場を意味する言葉に由来すると郷土史家ウー・タウン・ニャンは説明する。彼によれば、1952年に

シッサーソコンと呼ばれていた地域を区画整理してアパート形式の集合住宅を建設してヤンキンと名付けたのがヤンキンの名の最初という。そのヤンキンと昔からのカンバーが革命政権下に合併してヤンキン・タウンシップとなったのである。[THAUN NYAN 1985: 145-146]

ヤンキンの面積は約5平方キロメートルで、行政的には16の区 (*ya'kwe'*, ward) に下位区分されている。1973年からの10年間に13,883人増加して1983年のセンサスではタウンシップ全体で82,705人の人口を擁している。この人口増加数は、3~5万人の人口増加を記録した南北オッカラッパ、タケタ、さらにマヤンゴン、ティンガンジュン、フライン、インセインの各タウンシップには劣るものの、ヤンキンが人口増加が進行中の地域であることはいうまでもないだろう。

ヤンキン地区の住民構成は一般に公務員が多いとラングーンではいわれている。統計によれば、成年全労働者数1万1000人のうち9400人がサラリーマン労働者、軍関係者が800人で、農業従事者は300人にすぎない。[TAUNG NYAN 1985: 147] 私企業が限られている政治体制では、公務員の多い地区であることは数字が証明している。

(2) パヤー・ブエ

ヤンキン28仏祭礼は、ビルマの儀礼群の中ではパヤー・ブエ (*hpaya-pwe'*) のカテゴリーに入るものである。パヤーという言葉は、尊敬される人物、悟りを開いた仏陀、釈迦、仏陀像、パゴダ、僧侶及び王への呼びかけなどの複数の意味と用法がある。ブエはビルマ語において最も頻度が高く、一般的な儀礼を意味する用語である²⁾。ところで、ビルマ語でパヤー・ブエといえばパゴダ祭りをさすことがほとんどである。ビルマの民族誌には、パゴダの祭りが地域の年中行事となっている記述は多数みられる。[SHWAY YOE 1910: 169; NASH 1965: 118-123; SPIRO 1970: 230-231; 田村 1980: 104-106] パゴダは僧院と共にビルマ人仏教徒が参集する信仰の場となっている。パゴダの祭りには、前庭に芝居小屋や屋台の店が立ち並び近から参拝者を集める。ヤンキンにもモーガウン・パゴダがあり、その祭日は12月15日である。ところが、ヤンキンには28仏祭礼という別のパヤー・ブエの祭りがある。この祭礼は特定のパゴダとは関係がなく、28体の過去仏と1体の未来仏の仏像のお練り行列が主たるパフォ

2) ブエの他にアカンアナー (*āhkanānā*)、ダビン (*thābin*) の用語がある。前者は主に儀礼中のセレモニーや式次第を表わすことが多い。これはカンナー (*hkanā*) という「華美な」を意味する形容詞の名詞化である。後者はブエの大きなものとして説明され、大学の学位授与式や舞台芸能の表現に他の語と組み合わせられて用いられる。ブエ儀礼の詳細や全体像については[高谷 1986]を参照。尚、ブエは、言語環境によってパヤー・ブエのように有声化する。

ーマンスである。従ってこのパヤー・プエのパヤーは、パゴダではなく仏陀及び仏陀像をさしているのである。次にこの祭礼の大きな特徴であるお練り行列について考えてみたい。

Ⅱ. 行列のビルマ民族誌

(1) 行列の意味

ビルマ語では行列を表現する用語は二系統ある。ひとつは *tán-si* あるいは *si-tán* と呼ばれるもので、これらはチケットを買うための行列だとか偶発的に形成される行列に対して用いられる。それに対して儀礼的な行列には *hlè-le* という用語が当てられる。後者は文字通りでは巡るとか回るという意味である。たとえば托鉢に回ることは *hswán-hlè* といわれる。行列は後述するように人生儀礼、年中行事などビルマのプエ儀礼群において欠かせないパフォーマンスである。

行列に関する通文化的研究はあまりにもその行為が陳腐であることから皆無といつてよいが、祭祀研究に若干の分析が見られる。

行列の記号言語論的分析の小論を発表している Louis Marin は行列の行くルートを3つのタイプに分類する。(1) One-way route (2) Round trip (3) Closed circuit の3タイプである。第一の一方通行タイプは不可逆性を有し到達点に焦点がある。第二の円還タイプは振子のように可逆性を有しターニング・ポイントが強調される。第三の閉じた回路タイプは空間を取り込むことで象徴的に閉じた境界を持つ囲まれた空間が保護されると分析される。[MARIN 1987: 220-228]

Marin の分析は記号論的に如何に行列が空間を切り取るかが念頭にある。ここでは別の観点から行列について考えてみることにする。

行列は繰り返すまでもなく儀礼行為においてありふれたパフォーマンスの形式である。ビルマの村や町並みを歩くと、多くの行列に出会う。たとえば毎朝の托鉢の僧侶の行列、入仏門式 (*shinbyù*) に臨む少年達が精霊の祠や僧院に向かう行列、野迎の送りの葬列。我々はふたつの視点から基本的に行列を考えることができるかもしれない。

社会的行為として行列を見るとするなら、行列形成に三者関係つまりプロデューサーあるいはスポンサー、参加者、観衆が関与していることを指摘できよう。この場合、行列はプロデューサーの権威、力、富のデモンストレーションとしてみなすことができる。プロデューサーは観衆が彼の地位を評価することを期待する。ビルマの王朝時代に描かれたパゴダの壁画中の王宮儀礼描写に行列のモチーフを見出すことができる。

壁画，そしてそれに描かれた行列は王家のプロデューサーとしての力を永遠のものにしている。最近のビルマ政府主催のパレードもこれと同列に考えることができるだろう。仏教儀礼の行列においても寄進は開かれた行為とはいいいながら，やはりスポンサーにとっては晴れがましい披露の場面として機能している。

行列パフォーマンスの内容を第二の行列を考える視点として提示できよう。行列においては順番と位置が重要な要素であることはいうまでもないが，参列者はその衣裳と振るまいによって他と区別される。あるいはそれを要求されるといった方がいいかもしれない。ビルマの行列では王，王妃，王子，王女，大臣，兵士といった王朝時代の行列をほうふつさせるような参列者に出会うし，ナガー (*nàgá*) やガロン (*gàloun*) のような物語の中で語られる動物に扮した参列者も特徴的である。この場合，行列は文化のメタファーとして通時的あるいは共時的に順番と位置を示す見世物と化すのである。

Marin の分析は確かに行列を分類するひとつの指針を与えている。だが行列形成の社会的背景や行列構成の内容についての配慮はない。ビルマではどのような行列が観察されるのだろう。ビルマの人々はどのように行列行為を考えているのだろう。またどのような動機付けによって行列は形成されているのだろう。次節ではビルマで知られる行列パフォーマンスをたどりながら，儀礼行為における行列の社会的文化的背景について考察を進めることにしたい。

(2) ビルマの行列

ビルマの正月は太陽暦の4月半ばにあたる。旧年から新年への移行に際しては，喧騒な水祭りが繰り広げられる。水祭りはビルマだけではなく中国雲南省シーサンパンナの傣族やタイの平地タイ族においても正月の代表的な祝祭パフォーマンスであり，構造的に相似な起源説話を伝える。互いに水を掛け合うこの祭りのビルマにおける最近の流行としてはその掛け方がエスカレートし，ラングーン，マンダレーでは若者達が幌のないジープ型の車を連ねて市内各地の道路沿いに仮設されたマンダッ (*mānda'*) と呼ばれるステージを周り水の交換を行なう。嘲笑，罵声が飛び交う水入りの舌戦が展開する。だが，モータリゼーションが進む以前は市内を駆け巡るという慣習はなかったはずで，訪ねて来た人，道行く人が水のえじきになったことだろう。水掛けが一段落した段階でみられる正月ならではの行列は，川や湖に向かうそれである。行列は生魚を携えて川や湖で放すのである。彼らは生きとし生けるものに慈悲を施すことで功德³⁾になると説明する。またこの時期は学校や職場が長い年末年始の休暇になるこ

ともあって出家する志願者の行列にもしばしば出会う。この行列はラングーンではシュエダゴン・パゴダへ向かい、パゴダを守る土地の守護神に出家の加護を願う。志願者は相伴者にかつがれパゴダを周回する。その後僧院に向かい出家の儀式に臨むのである⁴⁾。太陽暦の5月中にあたるビルマ暦2月カソンの満月の日はシャカ祭りである。釈迦の生誕、成道、入滅を記念するこの祭りは、ビルマではニャウン・イエー・トゥン・ブエ (*Nyaun-yei-thwín-pwé*) と呼ばれ、大きなニャウンの木⁵⁾ に水を掛けるのが慣例となっている。人々は行列を作り、水瓶を抱いてニャウンの木に向かう。シュエダゴン・パゴダの境内にも多くのニャウンの木が植えてあるが、シャカ祭りでは東南角にあるニャウンの木が中心となって祭場が形成される。行列は主パゴダを回って祭場へと向かう。この行列の先頭には、四種の特別な衣裳をまとった人々の一団が配置されている。ダジャー (*thàcá*)、デヴァ・ナツ (*deiwà-na'*)、ナガー、ガロンの4種である。このパフォーマンスは釈迦が悟りを開いた時、動物、超自然的存在を問わず釈迦の成道を祝賀したというエピソードによるものといわれている。この4種の一団はそれぞれニャウンの木の四方に整列し、水掛けの先頭を切り、その後一般参列者が続く。其次第はパゴダ管理委員会のプログラムに従って行なわれる⁶⁾。

ビルマ暦7月ダディンジュの満月の日以降、ビルマでは僧院やパゴダに向かう行列をよく目にすることができる。ほぼ雨季に重なる3ヶ月に渡る安居 (*wa*) の間、仏教徒はそれぞれのやり方である人は僧院に通い、またある人は戒律を遵守したりして信仰にいそしみ、結婚式などの華美な行事は慎んできたのである。僧侶もまた旅行や外泊を避け、その身柄を置く僧院で修行に精進してきたのである。その安居が明ける。人々は宗教的な功德蓄積行事に積極的に企画あるいは参加するようになる。安居明けの前の夜はパゴダの境内に灯明がたかれる。天上での講話を終えた釈迦が地上に帰還するその道筋を火で照らすのだという。シュエダゴン・パゴダの境内には並んで灯明

3) ビルマ語でクドー (*kùthou*) と呼ばれる功德は仏教における重要な観念のひとつである。その獲得は仏教徒の信仰生活における最大の目的となっている。獲得された功德は死去の際に業 (カルマ、ビルマ語で *kan*) として清算されて、来世の転生を決定すると信じられている。いわば仏教徒のアイデンティティに関わる行動原理ともいえる。具体的な獲得方法は喜捨、戒律遵守、瞑想に三分される。

4) 入仏門式を経て出家した男たちの大半は、短期間で還俗する。入仏門式のライフサイクルにおける社会的意義については先に論じたことがある。[高谷 1982]

5) 和名ベンカルボダイジュ、学名 *ficus religiosa*。ビルマ語ではニャウン・ビン、正確には、ニャウン・ボーディ (*nyaun-bódi*) あるいはボーディ・ニャウンと呼ばれる種類である。ビルマには45種にのぼるニャウン・ビンがあるといわれている。[BURMA TRANSLATION ASSOCIATION 1967: 377] その中で仏教と関係が深いのはニャウン・ボーディであり、ニャウン・ビンといえばこの種類をさすことがほとんどである。

6) 私が観察する機会を得たのは1986年の祭りだが、最近はこのようにパゴダ管理委員会がリードする傾向があると聞いた。

に火を灯す人々の行列が見られる。

特にダディンジュの満月の日からビルマ暦8月ダザウンモンの満月の日までの1ヶ月間は、ボウン・カティン (*boun-kahtein*) のシーズンと呼ばれ、人々は共同で僧侶の黄衣を贈呈する慣習がある。この時期に贈ると他の時期の贈呈より得られる功德が大きいと信じられているのである。僧衣だけでなく僧院や僧侶への寄進や供物を運ぶ行列が各地で見られ、新聞もその記事を写真入りで掲載する。行列は必ずパデー・ピン (*pàdeithà-pin*) と呼ばれる供物用の木を含み、紙幣や供物が釣り下げられている。行列の単位は学校のものもあり、市場が主催するものもあった。だがそのメンバーシップは排他的なものではなく開かれたものである。人々は功德の独占は恥ずべき行為とみなし、功德の共有を強調する。ボウン・カティンのカティンは僧衣の意だがボウンは一般とか共通の意味であり、この行列がその組織立てにおいて開かれたものであることを示している。行列は楽団や踊り手を随伴しながら僧院へと向かう。

ボウン・カティンのシーズンの最後を飾るのがダザウンダイ (*tanhsauntain*) の祭りである。そのハイライトは国内主要なパゴダで行なわれる僧衣の織物競争である。この競争は釈迦の母堂が出家する息子のために1晩で僧衣を編んだエピソードにちなむものと説明されている。朝方僧衣が完成し、その行列がパゴダの境内を周回しパゴダ内の釈迦像に捧げられる。

ビルマの男性にとってイニシエーションにあたる入仏門式の行列についてはすでに言及した。ビルマ人のライフサイクルにおいてみられるもうひとつの行列は葬列である。ビルマでは葬式は病院なら病院、自宅なら自宅と亡くなった場所で執行され、葬列は遺骸を乗せた車を先頭に火葬場へ向かう。かつては僧侶や富裕なものだけが火葬に付されその他の人たちは土葬が慣例だったが、少なくとも信教上の違いによるものを除いてラングーンでは火葬に付することが一般的になりつつある。僧侶の葬式はポンジー・ピヤン (*hpòunjt-pyan*) と呼ばれて神話上の鳥カラウエ (*karàwei*) に乗って遺骸は火葬場へ行列で向かう。この葬列に参加することは一般の仏教徒にとって大きな功德になるものと評価されており、有名な僧侶である程、遺骸を運ぶ輿は派手になり功德もより大きくなる。

プエ儀礼ではないが、忘れてはならない行列が仏教の脈絡で毎朝儀礼的に行なわれている。托鉢の僧侶の行列である。僧侶は僧衣で両肩を必ず隠し、黙々と一言の礼を發することもなく鉢を肩から下げて在家仏教徒の家を回る。もっとも托鉢の行列は僧侶にとって修行の一環であり、行列である必然性はない。僧院によっては食物が僧院に直接交代で運び込まれ僧侶が院外に出る必要がないような手筈をしているところも

ある。托鉢行列が慣例になっているにしても出家と在家の間にはことばを交わすような直接的コミュニケーションはない。むしろ間接的で精神的なコミュニケーションが在家にとっての功德獲得の場として機能しているといった方が適切であろう。従ってこの行列は逆に僧の世界と非僧の世界の対照性を浮き彫りにするのである。

(3) 儀礼行列と行列儀礼

我々はここで仏教の脈絡における行列成立の背景を確認することができる。すなわち行列はいずれも世俗の世界から仏教的世界観における至上の存在であるところのパヤーの世界へ捧げられるプロセスで成立しているのである。その動機は功德の蓄積のためと説明される。行列は仏教的世界観の聖俗ふたつの世界を結ぶ境界のパフォーマンスなのであり、僧院あるいはパゴダの祭場に向かうパデータ・ビンに代表される供物の運搬のパフォーマンスなのである。そのパフォーマンスを通じて供物は聖なるものに変換し、捧げられる食物も単なる身体維持のためではなく、功德の変数となる。供物を運ぶ行列は、最も採用される頻度の高い功德蓄積の宗教的行為なのである。従って功德蓄積のための行列がビルマにおける儀礼行列の典型とみなすことが可能であろう。

さらに注目すべきことは、確認した典型的な行列が儀礼全体の一部であるという構成である。入仏門式における志願者を運ぶ行列は、彼らが釈迦出家の故事に倣うと説明されているように王子の格好をし見た目にも華やかなものであるが、あくまで後に予定されている出家の誓いのセレモニーの導入部にすぎないといっていだろう。葬列は葬式の祭場と火葬場を結ぶルート上に展開されるものであり、行列そのものが葬式全体の重要な要素ではあっても主たるモチーフとはいえないであろう。供物を運ぶ行列、水瓶、生魚を抱く行列、いずれも儀礼の祭場へ向かう際のパフォーマンスであり、儀礼の一部であることは他と同様である。

ところがヤンキン28仏祭礼の構成では、行列は一部ではない。それどころか祭礼にはお練り行列以外のパフォーマンスは含まれていないのである。従って祭礼は行列儀礼とも呼びうる特徴をそなえている。すなわち行列そのものが儀礼であり、祭場へ向かういわば目的地のある行列ではなく、目的地をもたない行列なのである。儀礼全体において目的地ではなくその途中が祭礼のパフォーマンスの場となるのである。Marin の分類は形態的で記号論的なものであるが、この分類は目的地の有無と祭祀空間の配置で分類することに特徴がある。

構造的には、托鉢の僧侶の行列も行列儀礼と呼びうるかもしれない。なぜならこの

行列には目的地はなく、行列の中途が托鉢と功德蓄積の場となっているからである。しかしこの行列は仏教の脈絡では儀礼と考えられておらず、プエとは呼ばれない。また、その成立は必然性のあるものではない。従って行列儀礼とはいえないであろう⁷⁾。

以上確認したように、ヤンキン28仏祭礼は行列パフォーマンスの点でビルマの儀礼群の中で特異的な形態を有しているのである。

Ⅲ. ヤンキン28仏祭礼

(1) 祭礼の素描

ヤンキン28仏祭礼の準備はビルマ暦7月ダディンジュに入ると始まる。ビルマ全土で仏教徒有志が来る安居明けに向けて寄付集め、祭りの段取りの相談に動き出す頃である。ヤンキンの各地区でもそれぞれ準備が始まる。

ヤンキン28仏祭礼は、第10回(1975年)に至りヤンキン・タウンシップ全領域を巻き込む祭礼に発展したけれども、同タウンシップのすべての仏教徒が結集するわけではない。後述するように複数の企画を包括した形でビルマ暦8月ダザウンモン月満月の日に28仏祭礼がヤンキンで開催されるのである。

ところでパヤー・プエと称される祭りの形態及び名称にはさまざまなものがある。28仏祭礼もそのひとつである。その内容を決定するのは、パヤー・ルージー (*hpayá-luji*) と呼ばれるパゴダ管理委員ともいうべき仏教の知識が豊富な知恵者である。ある程度大きなパゴダになると団体を組織し祭りの形態、期日などについて相談の上決定する。有名なパゴダでは開催時期が毎年決まっており、地域の年中行事化しているものもある。たとえばシュエダゴン・パゴダのパヤー・プエがビルマ暦12月ダバウン月であることはよく知られている。ヤンキンのモーガウン・パゴダは12月15日が祭日であることは先述した。だが、それ以外にもパヤー・ルージーとスポンサーとなる仏教徒有志次第でパゴダを舞台に、仏教儀礼が行なわれるのである。私が滞在していた1983年3月ランゲン市内で有名な四つのパゴダのひとつスレー・パゴダで28仏祭

7) 行列儀礼と呼ぶものは他にもある。ひとつはビルマ最大の精霊儀礼タウンピョン・ナッ・プエ (*taunpyoun-na'pwe*) であり、もうひとつはシャン州のインレー湖周辺で、ビルマ暦7月ダディンジュ月に展開される仏像の仏幸儀礼である。後者はパウンドーワー・パゴダに安置されている伝説の五体の仏像のうち四体が装飾された船に乗せられて湖畔の村々を巡るのである。だが、いずれも精霊伝説、仏像起源伝説の再現を表徴する行列儀礼である。その点ヤンキン28仏祭礼で巡る仏像は由緒あるものではなく、また巡る地点も伝説上の由緒とは無関係である。従ってカソリック世界の巡礼や日本の四国の遍路とも異なる。どちらも巡る空間よりも立ち寄り場所に宗教的意味があるからである。

礼が行なわれていた。

ヤンキン28仏祭礼のパヤー・ブエは先に確認したようにパゴダ祭りではない。中心となるのはパゴダではなく、マーラミヤイン・ダンマヨン (*dammayoun*) と呼ばれるダンマヨン (説教堂) である。このダンマヨンはウー・フラ・アウンという人物が寄進建立したものである。ダンマヨン自体の建立は28仏祭礼開始以前にさかのぼる。ウー・フラ・アウンは、ヤンキンでこの28仏祭礼を開催した契機は、地区の行政区画整理でヤンキン15区のパゴダがあった線路の向こう側が15区でなくなってしまうことによる信仰上の危機と説明する。他に寺院もなく、だからこそダンマヨンが15区の仏教徒のセンターとなったのであろう。15区はヤンキン28仏祭礼の発祥の地区である。後述する祭礼起源伝説によれば、切り倒したニャウンの木から刻んだ28仏をチェーマティウン寺院境内のお堂に安置したことになっており、第13回 (1978年) まではこの寺院から仏像を拝借してお練りをしていたといわれている。ところがこの年の祭礼が終了すると仏像が紛失してしまい、新しく寄進してもらった仏像が現在のものであり、普段はダンマヨンに厳重保管の上、安置してある。

ヤンキン28仏祭礼の期日はビルマ暦 8月ダザウンモン月15日の満月の日である。つまりダザウンダインの織物競争の翌日にあたる。第14回 (1979年) までは14日に行なっていたが、この年雨季が長引いて雨にたたられたのだという。翌年より15日へと1日ずれ現在に至っている。

祭礼はヤンキン・タウンシップをあげて行なわれるが全地区が含まれるわけではない。全部で行政区画として16の区がある中で5, 7, 8, 9, 10の各区が1986年時点で参加していない。実行委員会側の説明では、遠隔の7地区を除いて参加の意志はあるようだが空ポストがないので入れないのだという。ポストの数は過去仏の数つまり28である。未来仏は、28番目つまり釈迦の仏像を担当するグループが併せて担当することになっている。祭礼準備の最大の関心事はどの地区のどのグループがどの過去仏を担当するかということである。次頁に過去の仏像担当の編年を表にまとめた(表1)。

担当する仏像の決定はくじで行なわれるのが慣例になっており、そのくじ引きは祭日の約2週間前に行なわれる。その年の担当の過去仏が決まった後、各グループはそれぞれのやり方で具体的な準備を始める。各グループでは、あらかじめその年のパヤー・ダガー (*hpayá-taka*) と呼ばれる施主を決める。ダガーの特典は担当仏像の装飾ができることで最も名誉であり、大きな功德になるといわれている。その他の人は食事の世話をしたりお練りのユニフォームを寄付する側にまわる。グループによっては地区内に招待状を配付し、参集を呼びかける。招待状にはどの日誰が食事の寄付をす

表1 ヤンキン28仏祭礼仏像担当編年表

	地区名	第16回 (1981年)	第17回 (1982年)	第18回 (1983年)	第19回 (1984年)	第20回 (1985年)	第21回 (1986年)
1	(1) <i>Óu Ein</i>	(13)	(16)	(19)	(1)	(25)	(19)
2	(1) Middle	(24)	(15)	(22)	(14)	(5)	(18)
3	(1) Northern	(19)	(28)	(23)	(12)	(15)	(26)
4	(1) Agriculture	(27)	(12)				
5	(1) Ward		(14)	(20)	(2)	(12)	(17)
6	(2) <i>Pwé Youndan</i>			(13)	(7)	(17)	(27)
7	(3) Ward	(15)	(7)	(6)	(3)	(7)	(22)
8	(4) Ward	(28)	(17)	(8)	(22)	(14)	(3)
9	(5) Ward		(10)	(28)	(21)		
10	(6) Ward	(25)	(24)	(15)	(5)	(2)	(20)
11	(7) Ward		(5)	(3)	(20)		
12	(11) Ward		(22)	(2)	(16)	(18)	(10)
13	(11) Ward	(23)‡					
14	(12) Ward		(25)	(17)	(23)	(16)	(21)
15	(13) Ward	(11)	(1)	(24)	(4)	(24)	(28)
16	(14) <i>Aunzeiya St.</i>	(20)	(3)	(21)	(11)	(6)	(16)
17	(14) <i>Bóuyaza St.</i>	(8)	(11)	(16)	(9)	(19)	(14)
18	(14) <i>Magin St.</i>	(9)	(13)	(9)	(13)	(27)	(9)
19	(14) <i>Cau'koun-2</i>	(26)	(26)	(4)	(25)	(28)	(13)
20	(14) <i>Cau'koun-2</i>	(16)					
21	(14) <i>Zamburi' St.</i>	(2)	(4)			(9)	(6)
22	(15) Station St.	(7)	(8)	(25)	(18)	(1)	(7)
23	(15) Market St.	(12)	(27)	(14)	(8)	(23)	(23)
24	(15) <i>Sayeidan St.</i>	(17)	(18)	(11)	(10)	(10)	(12)
25	(15) <i>Ywamà</i>	(21)	(19)	(7)	(26)	(11)	(5)
26	(15) <i>Aweiya St.</i>	(14)	(6)	(5)	(19)	(8)	(11)
27	(15) <i>Ta'myei</i>	(4)	(9)	(12)	(15)	(21)	(1)
28	(15) <i>Thùhkkàta St.</i>	(5)	(2)	(27)	(28)	(13)	(24)
29	(15) <i>Àniga St.</i>	(1)		(18)	(17)	(22)	(2)
30	(15) <i>Thuhkàta St.</i>	(3)		(1)	(24)	(26)	(4)
31	(15) <i>Bóuyaza</i>	(18)					
32	(15) <i>Malamyain</i>		(23)				
33	(15) <i>Ta'myei</i>					(4)	(8)
34	(16) <i>Pyitaya</i>	(6)	(20)	(6)	(6)	(3)	(25)
35	(16) <i>Cai'khsan</i>	(10)	(21)	(27)	(27)	(20)	(15)
36	(16) <i>Hci'Hlain</i>	(22)					
37	(16) <i>Hci'Hlain</i>	(23)‡					

[1] 作表はウー・タウン・ニャン作成の一覧表をチェックしてさらに第21回(1986年)分を加えて再編成した

[2] 括弧内の数字は28仏中の順番を表わす

[3] (28)仏は未来仏興も担当する

[4] 同じ地区内でも複数参加している場合もある

[5] 第16回の‡はデータ上の重複

[6] 第18回のデータは(27)仏が重複しており、逆に(10)仏がなく一部不正確

るかを明記してあるのが通常の様式である。功德蓄積は明らかにデモンストレーションの意図を相伴している。

各地区の多様な祭礼への取り組み方の背景には、ひとつには富裕なダガーの存在如何であり、もうひとつには担当する過去仏の順番が関係しているといわれている。第一の過去仏、第二の過去仏という早い順番の過去仏はお練りで先に進むこともあって人気があり、準備における盛り上がり方も違うという。功德蓄積という点ではどの仏像だろうと差異はなく平等である。だが、実際にはくじ、人気度の点で差異が作り出されていることは注目に値する。その盛り上がり方は仏像の招請の仕方に歴然と表れる。準備が早く整ったところでは、1週間前にダンマヨンより担当の仏像を地区の仮設堂であるマンダッへ招請する。招請をしてその地区で祭りを始めてしまうことが可能なのである。こうして一体ずつ仏像が減って行く。逆に遅いところでは祭日の2日前にやっと招請していくのだが、そのようなマンダッはダガーがなかなか決まらなかった事情が暗示され、夜間マンダッを訪ねても守りの仏教徒有志が番をしているだけで寂しい風景である。

各グループの多様な取り組み方はお練り日以前の祭りの様子にも示されている。ヤンキン全体としてはヤンキン28仏祭礼であるが、地区によっては、灯明祭り（ミートゥン・プエ、*mīhtwān-pwé*）として祝っている場合もあり、地区内だけ前のお練り行列をしてしまう地区もある。またプザニヤ・プゾー・プエ（*puzāniyā-puzo-pwé*）と呼ばれる仏教儀礼の一形式の幕を下げているところもある。さらにヤンキン全体では1986年が第21回であるが、その地区が参加してから何回目の28仏祭礼であることを明示しているマンダッもあるのである。全体のお練り行列のパフォーマンスをどうするかも各地区のアイデアに任せられている。このように多様な各地区各グループの参加の仕方があって全体としてはヤンキン28仏祭礼が構成されているのである。従って地域のスケールをどこにおくかで祭礼の姿が違ってみえることになる。

祭日の前々日と前日、実行委員会の名誉役員が全マンダッを回る。各マンダッの状況、供される食事の内容が後で話題となる。そしていよいよ祭日当日を迎えるのである。

(2) 第21回（1986年）28仏祭礼

1986年の第21回ヤンキン28仏祭礼のお練り行列は、11月16日にヤンキン・タウンシップの予定されたルートをたどって行なわれた。当日午後2時頃より集合し始めた各仏興グループは午後3時に中央ダンマヨンを出発し午後12時に帰還した。お練り行列

に参加した行政及び協力機関のメンバーは、郡人民評議会から4名、地区人民評議会から15名、警察官15名、消防官74名、赤十字隊員55名、軍警察15名、委員145名、寄付集め担当者リーダー以下81名であった。

お練り行列のルートはいままでいつも同じだったわけではない。祭りの発展と参加地区の拡大につれて変遷してきた経緯がある。当初は14, 15, 16区のみ回ったが、次第に広く回るようになっていったといわれている。ヤンキン・タウンシップ全地区を仏像を車に乗せてお練りしたこともあるという。だがここ10年近くは現在のルートがほぼ定着している。(図2参照) また車の活用については担いだ方が楽しいという意見が支配的で現在の形に戻ったという説明を聞いた。また仏像を載せる輿にも変遷がある。現在は3代目だという。

お練りの各グループ出発に先立ってセレモニーが行なわれた。パーリ語総礼文の独唱と解説がスピーカーを通して流れる。そして郡人民評議会会長のテープカット。鐘を合図にいよいよ出発である。行列の順番と参列した概数を以下に紹介する。行列では管理運営委員会が計画したお練り行列全体の先導グループが先頭を歩き、その後を28の仏輿グループが練り歩く。

【先導グループ】

先導のバイク～広報のジープ～十坊の僧侶の乗ったトラック～仏祭管理委員会委員～少年踊り手9人～吉祥太鼓～仏教の神々(ブラーマン, ダジャーミン, 四神など)7人～精霊8人(パガンミン/タラインミン/ポーパ女王とその2人の息子/ナガー女王/水の女神/サラスワティ)～王族(王, 皇后, 王子, 王女)9人～バラモン2人～王杖2人～大臣2人～将校・軍団長4人

【仏輿グループ】

No. 1 (動員約150人/以下同様)～No. 2 (70人)～No. 3 (70人)～No. 4 (60人)～No. 5 (80人)～No. 6 (60人)～No. 7 (40人)～No. 8 (300人)～No. 9 (70人)～No. 10 (100人)～No. 11 (60人)～No. 12 (80人)～No. 13 (40人)～No. 14 (80人)～No. 15 (150人)～No. 16 (100人)～No. 17 (90人)～No. 18 (300人)～No. 19 (130人)～No. 20 (100人)～No. 21 (140人)～No. 22 (130人)～No. 23 (150人)～No. 24 (120人)～No. 25 (50人)～No. 26 (100人)～No. 27 (120人)～No. 28 (300人)

参列する人々の数は、仏輿グループの代表者あるいは参列者に尋ねたあくまで概数であり、全員が最初から最後まで行列しているわけではない。それでものべ3千人余

りになる。しかも沿道の観衆は別である。ヤンキン全体の人口約8万人を考えれば決して少ない数ではない。お練りの途中では、ケーキなどの食べ物、飲み物がふるまわれる。その準備は各地区の実行母体が行なっている。仏像は行列後ダンマヨンに戻り次の年まで安置される。各地区のグループが仮設したマンダッは葬式の場合と違って即座の解体を求められていない。各地区それぞれのやり方で後始末が行なわれていくのである。この年、お練り行列で集められた寄付金は45,640チャット(ca')⁸⁾に達した。

(3) 祭礼起源伝説

以下は祭礼起源として伝えられる説話で、祭礼の毎年のパンフレットに必ず載せられているものである。手元にあるのは1977年の祭礼実行委員会編集のものである。インタビューで採取した説話も人名や地名は不明でも基本的な構成は同様であった。

パウッターの前に約13エーカーの土地があった。その土地は学校の先生であるドー・キン・ソー・ラが両親からの遺産として所有していた。その土地の真ん中には、祖先の代より生えている幹の周囲が約20フィートもある大きなニャウンの木があり、樹精が宿っているとの評判であった。彼女の家族は、第二次世界大戦の間中ずっと危険を免れた。もう災難に遭うという時でも、そのニャウンから不思議なことに前もってお告げがあった。このように災難に全く遭わず生きながらえることができたのは、ニャウンの樹精のおかげと心得て毎月の白分、黒分、満月、新月の日には、灯明をともして拝んだ。

1957年頃、この土地を区画にして売却しようとしたところ、大きなニャウンの木が生えている区画だけが誰も買手がつかなかった。それで彼女は、長く布薩日を守ってから灯明をたいて、樹精に切り倒すことの許しを乞うた。3日後、彼女が眠りにおちようとした矢先、純白の着物を着た人物がニャウンの木を人差し指で指差して、仏像を刻んで崇拝しなさいと告げて消えてしまった。この不思議なことについて彼女は、チェーマティウン寺院のウー・テー・ザ院長とサヤ・ミャインにお伺いを立てた。その後、1962年にこのニャウンの木を切り倒して、28体の仏像を刻ませてその寺院の境内にお堂を建てて崇拝した。

1966年、パウッター地区から、ウー・コ・コー・ジー、ドー・キン・ソー・ラ、カンペー地区からウー・ソー・マウン、サヤ・ミャイン、サヤ・ネー・リン、ドー・ティ・ティ等がスポンサーとなって第1回28仏行列祭が開催された。このようにして毎年28体の仏像が練り歩くようになり、第3回から元大佐ウー・グン・シェイン、弁護士ウー・エーことウー・ピェ・テイン、ウー・フラ・アウンを始めとする地元の人々が音頭をとり、地区の若者の助けを得て、挙行してきた。1975年、第10回のお練り行列祭からヤンキン地区全部を上げてのパヤー・プエとして決められた。28仏がお練りをする地区は災難から免れることはよく知られている。

8) チャットはビルマの通貨単位である。1986年の調査当時の公定レートでは1チャットは約23円であった。このレートでは約4万5千チャットという総額はさほどでもないように思えるが、ビルマで大学卒業者の初任給が月額250から300チャットといわれていることを考えると寄付金の高額さが理解できる。

Ⅳ. ヤンキン28仏祭礼の設計図

これからこの祭礼の構造をいくつかの側面からなぞってみることにしたい。

(1) 祭礼の目的

入手できる限りの祭礼実行委員会編集の28仏祭礼のプログラムには共通して祭礼の目標として次の3点が挙げられている。

- (a) タウンシップ内に居住する男女が三災から免れ、健康かつ裕福で三宝を奉って信仰に専念することができるように。
- (b) 仏の崇高なる教えを引き続き大切に守ることができるように。
- (c) 28仏祭礼が滞りなく、つつがなく執り行なわれるように。

三災とは疾病、飢餓、強盗の3種の災難をさす。三宝は仏法僧である。28仏祭礼の目標として一般的にはアンダイエー・キン (*antaye-kin*)、つまり災難から免れるためと説明される。すなわち無病息災、病根退散の祭礼なのであり、退散のために仏像がお練りをするのである。

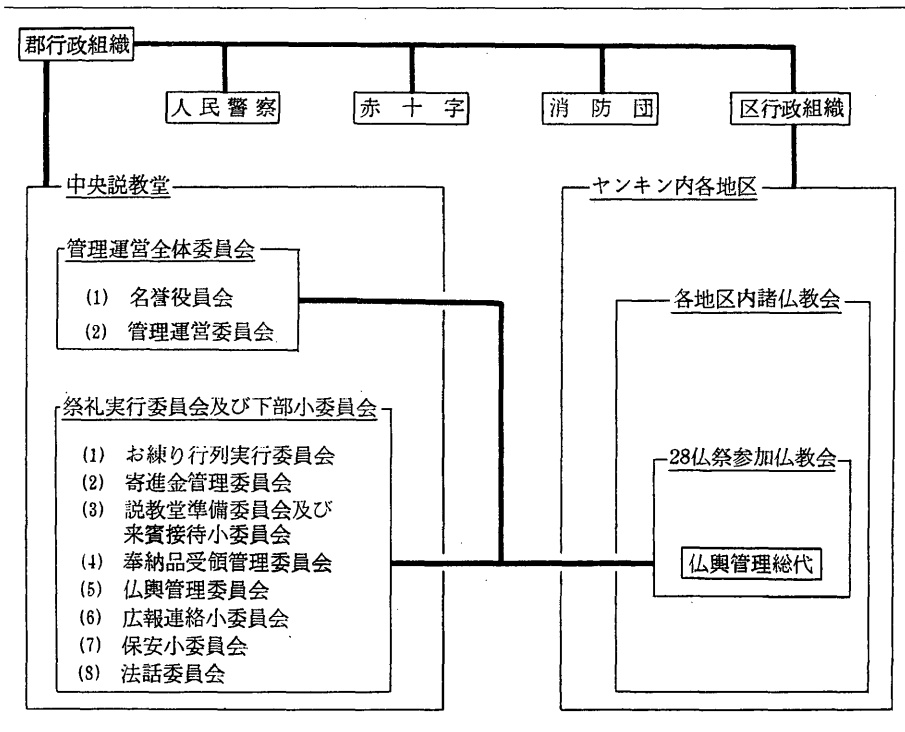
ここでヤンキンにおける行列の意味がその目的地のない行列の形態及びパフォーマンスから明らかになる。仏像のお練りがお祓いの意味を担っていることはいうまでもないだろう。従って地元の人々の説明は、超自然的存在に自分たちを守ってくれることを願うというよりも、降り掛かりうる災難から逃れることに重心があるように思われることは確認しておいてよいだろう。言語表現においても、他の超自然的存在に対するように、サウン (*sàun*) ——守る——を願うというよりも、災害からキン (*kin*) ——逃れる——ことが強調されている。逃れるは災害から守られるにも通じるが、少なくともヤンキン28仏祭礼では降り掛かる災害に対する意識が全面に出ているのである。そこで問題となるのは祭礼起源伝説である。

我々は伝説の年代を考慮しなければならない。奇跡が起こったのは第二次世界大戦以前かもしれない。だが、奇跡の木ニャウンの木を切り倒そうとする契機は1957年の区画開発の過程である。この時期がちょうどヤンキンの開発期に重なることはいうまでもない。そしてそれ以前は河川に沿った舟着場がある程度の小村落があるのみで、大半は未開発の土地景観が広がっていたことは想像にかたくない。ビルマでは大きなニャウンの木は切ってはいけないという考え方がある。ところがヤンキンでは切ったのである。

しかしながら、祭礼の目的には切ったニャウンの樹精に対する配慮は明示的に伺われない。ニャウンの木が生えていた場所は家屋が建ってしまっており、特別な場所としてマークされていない。現在の人々の記憶においてニャウンの木を切ったという行為について強く意識されているとは思えないのである。つまり、樹精のエピソードはエピソードに留まっており、それ以上の影響は及ぼしていないのである。従って特定の樹精に対する懐柔は祭礼の契機ではあったかもしれないが、現在のヤンキン28仏祭礼では、降り掛かる災難から逃れるという目的に拡大している。

ニャウンの樹精は仏像に変身してその奇跡の力を保持していると伝説は語る。その奇跡の力がヤンキンに満ちることが祭礼では期待されている。そこで展開される祭礼のコスモロジーの構造は、超自然的存在と人間との関係というよりも、超自然的存在と降り掛かる災難の関係という図式に変容し、人間の位置は一步離れている。祭礼は、ドー・キン・ソー・ラ個人の信仰に由来する段階から出発して、ヤンキンの空間全体が関与する祭礼へと発展してきた。本来人間に悪影響を及ぼすと信じられている切られたニャウンの木に由来する仏像が、ヤンキンの住民に降り掛かる災難の矢面に立っ

表2 ヤンキン28仏祭礼実行組織図(1986年)



ているのである。つまり人間にとってマイナスの存在が仏像に変身することでプラスの存在に変換され、さらにそのプラスのイメージは、地区全体の信仰の段階に発展する過程で増幅されているのである。

以上のように、祭礼の起源はラングーン首都圏の拡大という時代的背景と密接に結びついていることは確かである。そしてその目的は、切られた樹精への懐柔からより積極的な意味を付与され、さらに地域全体の病根退散へと発展しているのである。換言すれば、関係する人々の増加と平行する祭礼の進化といえるかもしれない。

(2) 祭礼の実行組織と仏教思考体系

この祭礼を実際に運営しているのはゴーバカ (*gópàkà*) と呼ばれる管理運営委員会の人々である。この組織はパゴダ祭りの運営委員会と同称である。1986年時点で構成員は9名、その書記格が祭礼実行委員会の委員長の任を担う。実行委員会の中はさら

表3 ヤンキン28仏祭礼実行委員会組織変遷表

第9回 (1974年)	第10回 (1975年)	第11回 (1976年)	第12回 (1977年)	第17回 (1982年)	第19—21回 (1984—86年)
先導管理運営組織	先導管理運営組織	先導管理運営組織	名誉役員管理運営委員会	管理運営全体委員会(下部組織)	名誉役員会 管理運営委員会
中央執行委員会 実行委員会 斎飯接待委員会	企画委員会 実行委員会 斎飯接待委員会	企画委員会 実行委員会 斎飯接待委員会	企画委員会	寄進品斎飯接待小委員会	
保安委員会 寄進品配置及び 説教堂唱和委員 会	保安委員会 寄進品配置及び 説教堂唱和委員 会 仏像引渡し受領 及び説教堂清掃 委員会 奉納品受領管理 委員会	保安委員会 寄進品配置及び 説教堂唱和委員 会 仏像引渡し受領 及び説教堂清掃 委員会 奉納品受領管理 委員会	保安委員会	保安小委員会 説教堂準備小委 員会 奉納品受領管理 小委員会	保安小委員会 説教堂準備委員 会及び来賓接待 小委員会 仏興管理委員会 奉納品受領管理 委員会
広報連絡委員会	広報連絡委員会		健康管理広報連 絡委員会 財政委員会 儀典委員会 来賓接待委員会 お練り行列実行 委員会	広報連絡委員会 財政記録小委員 会 お練り行列実行 委員会 娯楽小委員会 法話委員会	広報連絡小委員 会 寄進会管理委員 会 お練り行列実行 委員会 法話委員会

に8つの委員会に分かれている。(1)お練り行列実行委員会、(2)寄進金管理委員会、(3)説教堂準備委員会及び来賓接待小委員会、(4)奉納品受領管理委員会、(5)仏輿管理委員会、(6)広報連絡委員会、(7)保安小委員会、(8)法話委員会の各委員会である(表2)。これら委員会のメンバーはヤンキン各地区からの代表である各2名の28仏祭礼参加仏教会の仏輿管理総代で構成されている。彼らが実質的な祭礼推進組織である。各委員会の職務は委員会の名称がそのまま表現している。左に1974年以後の実行委員会の組織変遷表を掲げた(表3)。

各委員会の名称にはいくらか変化がみられるが、祭礼の実際上の職務と分担する基本的区分には変化はない。総じて(a) 仏像及び仏輿を含むお練り行列の世話、(b) 齋飯来客接待、(c) 奉納品、寄付金の管理の3点に集約されるといっていいだろう。

祭礼の実行組織を説明する際に委員会あるいは仏教会ということばを用いた。だがこの各組織は、9名のゴーバカを除いて継続的なものではない。委員会、仏教会と称したのはあくまでこの年の28仏祭礼のためのものである。地区全体でみればつねに多様なスケールの仏教徒有志が組織化する潜在性をもっている。ある地区の構成員といっても地区内の各種仏教儀礼のみに参加するとは限らない。地区外たとえば有名なパゴダへの参拝やパゴダ祭りへの参加もありうるし実際にそうである。この行動様式の背景にあるのは、功德にカウントされると信じられている行為がどのようなスケールの集団や組織のもとで行なわれようと、基本的には個人の業(カルマ)のバランスシートに還元されるという仏教的思考法である。功德獲得行為は場所を選ばない。但し、どこでもいいというわけではない。より効果的な功德蓄積を実行しようとする動機が働く。従って立会人としての観客の存在に対する意識が、強く儀礼参加の行為を支えている。つまり仏教徒の功德蓄積行為をより壮大にしようとする指向性が祭りを発展させていくのである。仏教信仰の実像は完全な個人主義ではない。仏教儀礼という状況において多様な集団が立ち表れるのである。

(3) 祭礼の構成——行列の意味

この祭礼実行には僧侶あるいは寺院は直接関係していない。厳密に言えば各地区はお練り行列以前に集まった齋飯を寺院に持っていき、お練り行列にも僧侶は加わって読経を行なう。だが、祭礼自体は僧侶の自己救済を目的とする修行とは関係が稀薄で、僧侶を中心とする仏教的世界観における「中心——聖」とは一線を画しており、「世俗性」の方へより傾いている。その世俗性は行列の運ぶ内容にも明示されている。寺院や僧侶のもとへ向かう行列には、寺院の仏具や僧侶の身の回りの物が供物として

運ばれるのに対し、ヤンキン28仏祭礼では、寺院や僧侶に直接かかわる供物は含まれていない。この点については同じ28仏祭礼でも1983年のスレー・パゴダの祭礼の行列に僧衣を携えた一群が加わっていたことと対照的であり、ヤンキンの同種の祭礼の構成の特異性を暗示している。ヤンキン28仏祭礼の行列では、巡る仏像、王朝時代のコスチュームを来た参列者、その他の仏教徒、踊り子、音楽隊がすべてであり、その他に夜間になると照明の一团が相伴するのみである。従って「パヤー」の世界に捧げるというよりは行列の内容を見る限り自分達にとってのエンターテインメントの様相が濃い。

行列そのもののメッセージにも特異性がみられる。他の儀礼行列は供物献上のメッセージを伝えることが儀礼行為の動機付けになっているのに対し、ヤンキン28仏祭礼は逆に寄付を募るメッセージで構成されている。この寄付は具体的にはダンマヨンの運営及び壮大化に供与されるのである。従って、行為自体は仏教信仰の功德蓄積の一端を成すものに疑いない。しかしそのパフォーマンスは俗世界で展開され、行列の後、功德に変換される過程で寄付の金や品物は神聖化するのである。

また行列の途中で広報のジープに乗ったゴーパーカのひとりが沿道の人々に語りかける。この管轄は法話委員会が行なう。仏教儀礼においての語りは通常僧侶が在家仏教徒に対して行なうが、ヤンキン28仏祭礼の場合僧侶が行なうことはない。行列に加わる僧侶は読経を続けるのみである。しかもその語りの内容は、28仏を信仰することによって得られた心の平安及び具体的な効能の体験である。従って28仏祭礼への関心喚起と参加者呼びかけの性格が濃い。僧侶の法話に人々を儀礼に誘う要素はその自己救済の修行精神から含まれることはない。

以上の点からもこの祭礼の特異性は確認される。換言すれば、仏教の伝統的行動様式に則っていないが、あるいは細部では僧侶への喜捨・僧侶の招待のモチーフを含んでいながら、全体としては世俗的な色彩が濃いのである。

この28仏祭礼のヤンキンの年中行事暦における位置を確認しておこう(表4)。ヤンキンで他の地域にみられない特徴的な年中行事は、ビルマ暦6月トータリン月に行なわれる1万本献花祭り、12月15日のモーガウン・パゴダ祭り、そして28仏祭礼である。他のシャカ祭り、僧衣贈呈祭り、タマネ (*htamahné*) 祭りなどは他の地域でも行われている祭りである。ヤンキンのみで行われている3つの祭りのうち、ひとつは寺院が、もうひとつはパゴダが祭りの主要な舞台となっている。従って祭場が限定された空間である。それに対し28仏祭礼はダンマヨンが起点であり終点となつてはいるが、祭場はお練りをする行列通過空間全体といていいだろう。お練りをする場所が

表4 ヤンキン年中行事暦

月名 (ビルマ暦月名)	ヤンキンにおけるプエ (pwé)	プエの行なわれる場所/実行組織
4月 (タグー)	<i>Thinjan Pwé</i> (新年節)	
5月 (カソ)	<i>Nyaun Yei thwán Pwé</i> (ジャカ祭り)	
6月 (ナヨ)		
7月 (ワゾ)	<i>Wazo Pwé</i> (僧衣贈呈祭り)	
8月 (ワーガウン)		地区毎に 布薩日遵守 ピンニャワディ (<i>Pinyawàdi</i>) 寺院
9月 (トータリン)	<i>Pán p̄aun Tì'thāun Ka' Hlu Pwé</i> (一万本献花祭り)	
10月 (ダディンジュ)	<i>Dhadinjuw' Pwé</i> (灯明祭り)	
11月 (ダザウンモン)	<i>Tahsauntain Pwé / M̄athóu Thingán M̄i Htwán Pwé</i> (灯明祭り) <i>Boun Kathein Puzànyà Pwé</i> (<i>Ḡi manóu Pwé</i>) <i>Hna'jei'shi'hsu Hpayá-Pwé</i> (28仏祭り) (ダザウンモン満月の日)	マーラマイン・ダンマヨン (<i>Malamyain Lán Dammayoun</i>) / ゴバカ・アプエ (<i>Gôpàkà Ahpwé</i>)
12月 (ナド)	<i>Môugáun Hpayá Pwé</i> (パゴダ祭り) (12月15日)	モーガウン・パゴダ (<i>Môugáun Pagoda</i>)
1月 (ピャート)		
2月 (タボードウエ)	<i>Hlàmahné Pwé</i> (タマネ祭り)	ピンニャワディ (<i>Pinyawàdi</i>) 寺院
3月 (ダバウン)		

広がればそれだけ祭場も拡大することになる。お練り行列が囲い込む空間のもつ意味は重要といわざるをえない。

(4) 祭礼の社会性

ニャウン28仏祭礼はヤンキン・タウンシップを上げて行なわれることから行政区画を背景にしているという点で明らかに社会性を帯びている。行政も関与している。先に言及したスレー・パゴダの同種の祭礼では、仏像が複数の輿に分かれておらず1台の車にまとめて載せられ、地域区分に基づいて運営されていないことは歴然として

いた。ヤンキンのそれは地域区画の多様な参加を含みながら構成されている。しかもその参加区画は発祥の地である15区から始まって多少の変遷はありながら確実に増加してきた。従って祭礼が地区の枠を越えて発展し、その社会的連帯に寄与してきたことは否定できない。もっとも参加地区すべてが同等というわけではない。14, 15, 16の3区がポストを独占して他の地区に少なくとも1986年時点まで空けようとしていない。ということはヤンキン・タウンシップを上げての祭礼に途中から位置付けられたとはいえ、社会的連帯の広汎化にはブレーキの要素も内在していることになる。この点が今後どう展開していくかは未知数である。しかしながら新興住宅地でこの祭礼が始まったことはビルマ人の祭祀観を考える意味で重要である。つまり彼らは地縁を基盤とする祭祀を年中行事の中に取り入れる行動様式の枠組を思考体系の中に含んでいることになる。しかもその祭礼が寺院やパゴダと結びつかない形で実践されてきたことは注目に値する。

祭祀の発展はつねにより多くの人々の関心を集める方向に動かそうとされてきたし、実際に動いてきた。その意味から行列のストリート・パフォーマンスの有効性は認めなければならない。閉じた空間から行列という線を媒介にして面へと祭場が広がっていくのである。パゴダ祭りや寺院へ供物を運んでいく行列にもストリート・パフォーマンスは見られる。だが、28仏祭礼の場合は、行列の沿道にいる観衆をパフォーマンスで功德蓄積行為の現場に取り込もうとしている。他方、前者の行列にはそのような仕掛けは用意されていない。行列に参加するにはあらかじめ供物寄進という契約が必要なのである。行列自体は開かれた儀礼であるが、飛び込みが入っても功德蓄積に必ずしもつながらない。騒がしくて楽しい行列に好奇心のある子供達が紛れ込むだけである。仏教の功德獲得行為は場所を選ばないといいながら、観衆に対してパフォーマンスが期待する役割が異なり、この2種の行列には明らかに違いがある。観衆をパフォーマンスの中に取り込もうとするヤンキン28仏祭礼は、行列が移動する空間の社会的背景を意識しているのである。供物を運ぶ行列にはその意識は必要としない。

(5) まとめ——祭祀の都市性

右にヤンキン28仏祭礼の特徴をまとめてみる。その特徴を明示するために他のプエ儀礼の行列と対照的に列挙した(表5)。

ビルマ語の用法には「都市文化 (*myòupyà yincèihmù*)」「地方文化 (*cèile' yincèihmù*)」の類別がある。またラングーンを念頭において「首都生活 (*myòuto bàwà*)」という表現もある。しかしながら、ヤンキンの人々に新しい祭祀を創造したという意識はない。

表5 ヤンキン28仏祭礼の特徴対照表

	ヤンキン28仏祭礼	他のプエ儀礼の行列
目的	病根退散・無病息災	供物運搬
伝説	ニャウンの木を切った	+
中心	+ (ダンマヨン)	僧院・パゴダ
祭場空間	広がる祭場	区切られた祭場
動機付け	功德蓄積	功德蓄積
差異化のモチーフ	くじによる差異化	+ (共有)
行列	目的地のない行列	目的地のある行列
行列の内容	仏輿を運ぶ	供物を運ぶ
象徴的トランス ポーション	俗界のトランス ポーション	聖/俗の境界トランス ポーション
祭祀執行者	行政官 (テープカット)	僧侶、パヤー・ルージー
パフォーマンス	寄付を募るストリート パフォーマンス	供物披露のストリート パフォーマンス
参加	各地区毎の多様な参加	均質的な参加
社会性	新興住宅地の連帯の契機	既存の連帯の確認

+ 該当なし

認識のレベルでは従来の祭祀体系と連続しているのである。従って地域性のある祭祀から考える限り「都市」民としてのアイデンティティは必ずしも形成されているとはいえないのである。

いままで本論文ではプロローグで断わったように「都市」ということばを意図的に避けてきた。確かに分析のやり方としては都市を最初に規定する方法もある。だがここではその方法を探らなかった。しかし本論文では「都市の祭り」と「いなかの祭り」という二分法を前提としなくても、ヤンキンの祭礼がいままで報告された知られる儀礼と区別しうる特異性をそなえていることを明らかにしてきた。その特異性を分析的にここではじめて「都市性」と呼び、そしてその特異性を有する祭礼を「都市祭祀」と呼ぶことにしたい。「都市」で行なわれる祭礼だから「都市祭祀」という導き方ではなく、特異性を有しているから「都市祭祀」と定義するのである。

そこで「都市祭祀」の特異性から逆に「都市」をイメージ的に規定してみることにしたい。祭祀の中に都市空間を構成する諸要素を導き出すのである。第一に、病根退散・無病息災の現世的利益の性格が祭りの目的として前面に出ていることは、逆に降り掛かる災難に対する意識、願望希求の契機が祭祀の背景となる空間に満ちていることを意味するのではないだろうか。そのような空間を「都市」と呼びうるかもしれない。切られたニャウンの木は仏像に刻まれることで非生活空間から生活空間の側に取り込まれ、悪影響を及ぼす加害者の立場から災難を除き願望をかなえる利益提供者に

変身しているのである。

第二に、祭場の配置からイメージしてみる。祭場空間が広がることは当然のことだが祭場が限定されていないことを意味する。従って祭場と生活空間の区分が薄らぐことになる。仏教信仰の場である僧院は「パヤー」の居住空間である。しかしダンマヨンもマンダッも僧侶の居住空間ではない。祭祀の時に僧侶を招請する仮の場所である。これらはパゴダと同様に非僧侶が運営する場所である。都市祭祀では祭場が限定された空間から外に出る。従って居住空間全体が祭場と化す可能性を帯びているのが「都市」と逆に規定できよう。最近のランゲーンの水掛け祭りの喧騒も祭場を限定せず、水の交換ができる場所はすべて祭場と化す。同様な考察が可能である。

居住空間と祭場との重なりは、ダンマヨンの宗教的意味からもいえる。ダンマヨンはある意味で都市的存在といえるかもしれない。ダンマヨンの中にはパゴダや僧院の境内に建てられているものもあるが、ヤンキンのマラミャイン・ダンマヨンは単独のダンマヨンである。特定の僧院やパゴダとは関係のない宗教的脈絡の上に建てられているのである。従って僧侶の自己救済的な世界観からは遠い位置にある。しかも宗教とは別の理念に基づく行政側の管理機構がこの祭礼に関与している。その意味においてタウンシップ人民評議会議長によるテープカットは象徴的である。宗教的空間が日常空間から隔離されず、生活習慣の空間により重なっているのが「都市」といえるのである。

第三にエンターテインメントの側面から考えてみよう。28仏祭礼にはエンターテインメントを増幅させる設計図がある。各地区は、それぞれのアイデアで仏像を飾って興を仕立てる。その仕立て方はパヤー・ダガーの名誉につながる。しかもくじによる差異化もからむ。アイデアの企画が並列するなら仏興間の競争につながる可能性は高い。

お練り行列での運搬は、一過性で届けてしまえば終わるものではない。毎年繰り返されるエンターテインメントである。従って運ぶ中味ではなく、運び方がアイデアを要求している。ストリート・パフォーマンスも年を追うごとに派手になる。たとえば音楽隊の楽器設備で1983年にはみられなかった電子楽器が1986年の行列に多数加わっていた。シュエヨー (*shueiyōu*) 踊りという粗野で楽しい踊り手の連も増えた。新しいアイデアが加わる設計図の余地がこの祭礼にはある。これは「都市」空間を活用する設計図のモチーフの特性といえるかもしれない。この点については経済的要素も見逃すことはできない。装飾が派手になるにつれてかかる経費が増加していることは確かである。「金の動員力」が無視できない要素として「都市」空間に内在している。

以上のように「都市祭祀」より「都市」のイメージを逆に規定してみた。それらのイメージに該当するのは「地方」にもあるかもしれない。しかしながらラングーンではそのイメージがより強く印象付けられるのである。それだけヤンキンの28仏祭礼が特異性を有することは確かである。それにもかかわらず、祭礼実行の基本的動機付けが功德蓄積で説明されていることは改めて注意を喚起する。つまり仏教の思考体系が「都市性」「都市祭祀」の独自性を打ち消しているのである。この点は、ラングーン市民に「都市」民としてのアイデンティティが必ずしも形成されていないことと深く関係してくる。改めてビルマにおける、仏教の説明の手段としての思考体系すなわち仏教信仰の浸透を想起せざるをえないのである。仏教の思考体系についての新しい視点が「都市性」の中に求められるのである。

(6) 祭礼の増殖とその将来

ヤンキン28仏祭礼は、その祭場の空間との関係からさらに発展する可能性をもっている。実際それはこの祭礼の歴史が証明している。

この祭礼は当初ヤンキン15区で始まったものである。そして第10回からヤンキン全体の祭礼となった。タウンシップ全体となると当然のことながら行政組織の管轄下に入って行なわれている。調べた限りこの28仏祭礼はラングーンではヤンキンが最も古く最も盛んといわれている。ラングーン市内ではタムエ・タウンシップが1983年から、ティンガンジュンが1986年から行なっていると聞いた。その他いつから始まったかの情報は得られなかったが、行なっているといわれているのが、ランマドー、バハンヌーチンマヌン・ロード、南オッカラップ13区、北オッカラップ・トーチャー地区などである。ラングーン管区以外では、マンダレー管区ピンマナーの28仏祭礼が盛大だといわれている。その他にもテナサリム管区ダウエ、さらにデルタ地帯が本場との未確認情報もあった。

ラングーンのヤンキン以外の祭礼起源伝説は不明であるが、このタイプの祭礼がスーレー・パゴダの事例のようにパゴダ管理委員会が考える祭礼様式の一選択肢であることを考えると、ヤンキンの28仏祭礼の隆盛が波及したといえなくはない。つまり祭りの増殖である。ラングーン以外の地区で行なわれている28仏祭礼の起源は、おそらくより古いであろうことは予想される。だが、ヤンキンの28仏祭礼はそれをラングーンの空間の脈絡で再解釈した祭礼であるからこそ発展したのではないだろうか。当然のことながら、もっと別のアイデアの設計図に基づく祭礼がラングーンの他の地区で始まっている可能性を否定しない。いずれにしてもヤンキン28仏祭礼の設計図の源泉

を探究する作業と平行して祭礼の今後の動向を見守る必要があるのである。

エ ピ ロ ー グ

儀礼の設計図はどのようにして描かれるのだろうか。本論文では、1966年から始まったビルマ・ラングーンのある祭祀を取り上げた。従って儀礼そのものは「伝統」ということばが内包する曖昧さを回避しうる比較的短い歴史しかもっていない。本論文で確認したようにこの祭祀は、いくつかの点でいまままでビルマについて報告された儀礼とは様相を異にしている。だが、他方、この祭祀は仏教に深く色づけされたビルマの価値体系と行動様式の枠組みに従っている。この祭祀の設計図はどのようにして描かれてきたのだろうか。そしてこれからどのように描かれていくのだろうか。その考察は今後の課題である。

改めてラングーンは「都市」なのかと問う。本論文で注意深く用いた「都市」はあくまでビルマの文化的脈絡から導き出された概念である。用語の上では「都市」は類別されているがアイデンティティの面では必ずしもそうだとはいえない。ヤンキンの祭祀の特異性を分析的に「都市性」と呼んだが、よりふさわしい表現が他にあるかもしれない。だがその探究は、ビルマ祭祀体系の考察と平行させながら、ラングーンの研究をさらに深めていく中で追求していく開かれた課題としたい。

付 記

本論文のデータの収集は、文部省アジア諸国等派遣留学生として滞在した1983年2月から1984年11月までの期間と1986年11月の再調査において行なわれた。関係機関に対して謝意を申し上げたい。また現場でのデータ収集には、ヤンキンの人々の多大なる協力があつた。祭礼の前日と前々日各地区のマンダッを回った時の人々の歓待振りが忘れられない。ヤンキンへ導いてくれたビルマの友人そしてヤンキンの多くの人々に感謝したい気持ちで一杯である。本論文を謹んでヤンキンの人々と素晴らしい友人に捧げたい。尚、本論文の骨格は、1988年1月の九州人類学研究会での発表をもとにしている。同会員の諸氏に併せて謝意を表したい。

文 献

AUNG MOE

1983 1983 Census: 228 Years of Yangon. *The Working People's Daily*, November 11, 1983.

THE BURMA RESEARCH GROUP (ed.)

1987 *Burma and Japan: Basic Studies on their Cultural and Social Structure*. The Burma Research Group, c/o The Laboratory of the Burmese Course, Department of Indochinese, Faculty of Foreign Studies, Tokyo University of Foreign Studies.

高谷 祭祀と地域性

- BURMA TRANSLATION ASSOCIATION (*Myanmanainngan Bathapyan Sapei Àihín*)
1967 *Encyclopedia Birmanica (Myammā Swesoun hcân)*, Vol. 4. (3rd ed.) Sapeibeiman.
- IMMIGRATION AND POWER DEPARTMENT
1986 “*Rangoon City*” 1983 Population Census. The Socialist Republic of the Union of Burma, Ministry of Home and Religious Affairs.
- MARIN, Louis
1987 Notes on a Semiotic Approach to *Parade, Cortège, and Procession*. In A. Falassi (ed.), *Time out of Time*, University of New Mexico Press, pp. 220–228.
- NASH, Manning
1965 *The Golden Road to Modernity: Village Life in Contemporary Burma*. John Wiley & Sons, Inc.
- 大野 徹
1982 「ラングーンの衛星都市ターケータ」『昭和58年度特定研究報告書』大阪外国語大学, pp. 95–105。
- PEARN, B. R.
1939 *History of Rangoon*. American Baptist Mission Press.
- SHWAY YOE
1910(1882) *The Burman: His Life and Notions*. Macmillan and Co. Ltd.
- SPIRO, Melford E.
1970 *Buddhism and Society: A Great Tradition and its Burmese Vicissitudes*. University of California Press.
- 高谷紀夫
1982 「ビルマの仏教と社会——仏教の比較考察からの試論」『民族学研究』47(1): 51–71。
1986 「PWEの世界——ビルマ儀礼論」『鹿児島大学史学科報告』33: 41–54。
- TAKATANI, Michio
1987 Ritual Processions in Burma. In The Burma Research Group (ed.) *Burma and Japan: Basic Studies on their Cultural and Social Structure*, The Burma Research Group, c/o The Laboratory of the Burmese Course, Department of Indochinese, Faculty of Foreign Studies, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 135–144.
- 田村克己
1980 「上ビルマの一農村における年中儀礼と二元性」『鹿児島大学南総研紀要』1(1): 93–141。
- U THAUNG NYAN
1985 Yankin. *Yankin Magazine*. Yankin Township Writers Association, pp. 145–147.
- YANKIN TOWNSHIP 28 BUDDHA IMAGES FESTIVAL EXECUTIVE COMMITTEE
(*Yankin Myòune hna' jei' shi'hsu-hpayà-pwé cínphàyei komati*)
1974, 1975, 1976, 1977, 1982, 1984, 1985, 1986
Plan and Program of 28 Buddha Images Festival in Yankin Township No. 9, 10, 11, 12, 17, 19, 20, 21. (*Yankin Myòune* 9, 10, 11, 12, 17, 19, 20, 21 *ceinmyau' hna'jei'shi'hsu-hpayà-pwé-to cínphaye simanhee'*)
1977 *Pamphlet of 12th 28 Buddha Images Festival in Yankin, 1977*. (12 *ceinmyau' Yankin Myòune hna'jei'shi'hsu-hpayà-pwé*)